

巻頭言

大学の存続

認知予備力研究センター長

武田 雅俊

激しい言葉であるが、わが国の大学の30%は定員割れを起こしている。18歳人口が減少し進学率が頭打ちになり大学入学者が減り始めるという「2018年問題」は大学関係者の間では長らく言われてきたことであるが、これから全国764大学のうちかなりの数の大学は淘汰されていく。

「時流に迎合することを時代の先取りと錯覚し、見取り図を持たないまま局所的な改革を試みることは、かえって折角培ってきた良質なもので手放してしまうことになりかねない。逆に、泰然自若と動かないことこそ重要と無為に過ごすことは、新しい時代の到来を自覚せず、それと対決しようとしないうらの知恵と勇気の欠如を証明している退嬰的な態度にしかならない。必要なことは、小変化に流されない冷静な認識と改革せざるを得ないと覚悟する自己を支える勇気と、あれこれと具体的方策を編み出す知恵であろう。このような変革の時代にあってより良い大学像を思い描くためには、学問的根拠に根差した確かな視点を持たなくてはならない。このような背景から、ここでは、大学とは何かという、その本質を今一度考え直してみたい。」とは、大学改革に役立つことを願い、下記の「大学の理念」翻訳の労を取られた福井一光先生の言葉である。

カール・ヤスパースによる「大学の理念」

20世紀を代表する哲学者・精神病理学者であったハイデルベルグ大学のカール・ヤスパースは、「大学の理念」(福井一光訳、理想社、1999)の中で、「大学の課題」や「大学の現実的存立の諸前提」について述べている。「大学は、職業の基盤となる専門的知識を身につける学校であり、教養の世界であり、研究の施設である。すなわち、職業への準備としての授業、教育(教養)、研究の3つの要素が重要となる」としている。

ここではヤスパースの言う「職業準備としての授業」の重要性については触れない。紙面の制限もあり、本学の教員の多くが理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の育成を目標として日々努力していることは十分に了解しているからである。教養(教育)の重要性については、ヤスパースが、「教育(教養)」の根本形式として、a) スコラ的教育、b) 師匠による教育、c) ソクラテス的教育の3つを挙げていることを紹介しておきたい。a) スコラ的教育とは、昔からある教材を体系的に教えるという教育であり、教師は書物に書かれた内容をただ伝達するだけの役割を果たす。もちろんこのような知識の伝達はどのような教育にも必要なものであるが、それだけでは十分ではない。優れた教師はスコラ的教育のレベルだけでなく、b) 師匠による教育をわきまえている。師匠による教育は、非人格的な知識の伝達ではなく、一人の人格性が意味を持つ。教師はその優れた人間性により崇拜され、学生か

ら慕われる存在として機能する。教師として十分に機能するためには、「あの先生が言うことだから」と学生から畏敬をもって受け取られることが望まれる。そして、ヤスパースは、この2つのレベルを超えた教育形式としてc) ソクラテス的教育を挙げる。ソクラテス的教育では、教師と学生はその精神によって同等の水準にあり、両者は理念に従って自由であり、徹底的な問いと真実に対する謙虚さと、お互いの議論により、教師は学生の中にある能力が生み出されるように援助する役割を担う。

大学における研究の重要性について以下のように述べている。「研究と授業の統合は、大学でのみ実現できることである。最高の研究者は同時に唯一の良い教師となることができる。研究者のみが認識の本来的な過程との接触を可能にするからである。優れた研究者こそが生きた学問であり、こうした人間との交流の中で、学問がいかにして根源的に存在するのかが直観され得る。優れた研究者は同じ衝撃を弟子の中に呼び覚ますことにより、学問の源泉へと導くことができ、自ら研究する人だけが、本質的な教えを学生に伝えることができる。」と。

本学の立ち位置

現代社会の急激な変化に対応して、優れた「職業の基盤となる専門的知識を身につける学校」として本学が社会に認知されるためには、優れた「教育（教養）」と優れた「研究」が重要というヤスパースの主張には全面的な賛同の意を表したい。平成18年の開学から12年を経過した時期を迎えた本学は、最初のステージをクリアして次の段階に脱皮すべき時に来ているものと考えている。「職業の基盤となる専門的知識を身につける学校」の段階から、本学は、より良い「教育（教養）」と優れた「研究」の実現に向けて進んでいくべき時期にあるのではないかと思う。

研究と教育の融合

筆者は認知予備力研究センター（Cognitive Reserve Research Center; CRRC）長として赴任した。長年、大阪大学精神医学教室において認知症にかかわる基礎・臨床研究に従事してきたが、認知予備力の本態を解明するための研究に従事したいと思っている。認知予備力は、認知症予防や認知症への介入法を考える際にはもっとも重要となる概念であるが、いまだ生物学的本態は解明されていないからである。

認知予備力研究センターでは、これまで6回のセミナーを開催し、毎回2-30名の参加者があった。また、毎月1回のCRRCたよりを発行して学内外の研究者と共に情報を共有している。具体的な研究活動としては、認知予備力調査票を考案して地域在住高齢者の調査を開始するところまでできた。このような積み重ねの作業は、認知予備力とは何なのかを知りたい、そのためには何をしなければならぬのか、そのために自分にできることは何かという問いに答える形で始めたものである。このような姿勢は当然教育にもフィードバックできるものと思っている。本学の学生さんに対する認知症に関するカリキュラムを整理統合して、より有機的な認知症に関する教育体系が整えられ、本学の卒業生の認知症に関する知識と技術が高められるように努力したい。そして、このような教育を受けた若い人材が研究活動に興味を持ち、自ら研究に参加したいとの気持ちになってくれることになれば、それは本学の進むべき一つの方向性になりうるものと考えている。